『理科の教育』1956年9月号（日本理科教育学会編/東洋館）

講座　教育調査　Ⅰ

矢　口　　新

教育調査の理念

（１）

教育調査というと、何かわれわれには疎遠のもののような感じをうけはしないだろうか。とくに理科の教育を問題にしているわれわれはあまり縁がないように感ぜられる。われわれの頭の中にある調査というものの姿はものものしい調査票があって、それに記入して、それを集計して、それを解釈する、あの形のものである。一時、教育課程の計画のための調査とか、地域社会の教育課題の調査とかがはやったが、それはいかにもものものしいものであった。またそのほかにも、文部省の調査課とか、県の教育委員会の調査課とかから、いろいろな調査がくる。そういうものがわれわれの頭の中にあって、調査とはああいうものだという考えがあるのである。それは現場の理科の教育とあまり関係がないと感じられる。

しかし調査というものを本来そういうように考えるわれわれの頭に問題があるのである。本当に必要を感じていることは何か、ということからわれわれの研究や勉強のしかたを考えてみたらどうなるであろうか。しばらく調査ということばから離れて、もっとも必要なわれわれの勉強や研究は何か、その仕方はどうしたらよいかを考えてみよう。

（２）

さて、まず研究とか勉強とかいうのは何かということについて考えて、前提となることを考えておこう。われわれは毎日教育活動を行っているが、この教育をもう少しよくしようという意欲をもっている。この前進の意欲があるということが、教育の研究とか勉強とかの前提である。そういう意欲を自分はもたないという人もいるかもしれないが、それは口先だけのことである。本当は今自分がやっていることについて、これがよいのだという気持をもってやっているのである。それは、やはりよりよいものを求めるという意欲のあらわれなのである。だからこころみに、僕は意欲なんかもたないという人に対して、お前のやっていることはなっておらんとボロクソにいえば、その人は怒るにちがいない。意欲なんかない人だったら、そういわれても怒らないはずなのだが、実際はそんなことはありえない。やはり怒るのである。つまり口先でなんといおうと、やはり自分のやっていることをよしとしているのである。それはつまりよりよいものを求めている人間の姿なのである。よりよくしようということは、その人がそれを自覚しているとしないとにかかわらず、人間の本然のものなのである。

さて、研究はここから出発するのである。研究といっても、勉強といっても、そうむずかしく考える必要はない。もっとくだいていえば、何かよいやり方はないか、ということをさがすことだということである。また今やっていることはどこが悪いかということをさぐることだと考えてもよい。

ところでわれわれが今問題にしたいのは、この何かよりよいやり方はないかとさがすさがし方であり、何か具合の悪いことはないかとさがすさがし方である。どういうふうにしたら――これを勉強法とか研究法とかいってもよい――より能率的な、より正しい研究法になるか、さがし方になるかということである。

人間はよりよくしようという意欲だけあっても、そ

の意欲を実現する筋道をよく考えなければ、それは実現されない。その筋道もただ考えるだけでは正しい筋道は考えられないのである。そこに研究法とか勉強法とかを考える必要が起ってくるのである。

（３）

さてこれまで、われわれは、よりよいものをさがすさがし方として、どんな方法をもっていただろうか。もう少し具体的に話をするために、理科の学習指導法をよりよくするとか、カリキュラムをよりよくするとかいうことを頭において考えてみよう。

文部省の指導要領が出てカリキュラムをつくって、指導要領に従った教科書ができて、それで学習指導を実際にやってみると、具合のわるいところを感ずることがある。どうも具合がわるいようだと何となく感ずる。しかしそれはどこが具合が悪いのかというと、自分でもよくわからない。分る場合もあるが何かふに落ちないこともある。われわれは生来謙譲にできているから、これは自分の考え方にまちがいがあるのだろうと考えて、文部省のえらい先生や、えらい学者の人をよんできて話をきこうとする。また頭のいい付属の先生などがやっている学習指導をみて、そのとおりまねをしようとして、あるいはその考え方を学ぼうとして、いっしょうけんめい努力する。また理科の学習指導法について、えらい学者や付属の先生などが書いたものをみようとする。

こういう態度は基本的にまちがいでない。もし具合がわるいからというので、これは指導要領が悪いのだ、教科書が悪いのだと、自分だけできめてしまって、自分のやっていることが最もよいとするならば、その人に進歩はないであろう。どういう実力のある人でも、そういう主観的な態度はよろしくない。われわれのやっていることには、無限に改善すべきことがあるのであり、自分の最善の努力も、それを謙虚に反省するという態度は最も基本的に必要な態度であり、人間としてなくてならぬ態度である。

ところで問題は、その態度でなく、具合のわるい所、よりよいものをさがす方法である。それについては、われわれは、もう少し考えてみる必要があるのではないだろうか。

いったい理科の学習指導法がよくわかるというために、われわれはどういうことをしなければならないだろうか。あまり固苦しくなく、ごく常識的に、考えていただきたい。だれか人の書いた本をよんで、それで、理科の指導のベテランになれると考えられるだろうか。おそらく、そう聞かれたら先生方は、そうではありませんと答えるだろう。やはり、実際に経験して、何回も何回も自分でやってみて、それで一人前になるのだと考えておられると思う。もしだれか優れた人の本を読んで、一人前になれるとしたら簡単なものであるが、そうではないであろう。さてこのことは何も少しもあたらしいことではないのであるが、その意味は教育についての研究とか勉強とかを考えるときに、実は重要な意味をもってくるのである。

というのは、実際にベテランになるには、経験が非常に重要であると考えられていながら、さて勉強とか研究とかいうと、人の話を聞くとか、本をよむとか、人のやっているものを見るとかといったことばかりが勉強と考えられ、研究と考えられているのである。つまり他にばかり範を求めて、よそのものを受けとるということばかりが考えられるのである。

自分のやっていること、すなわち経験はどうかというと、どちらかといえば、これはめくらめっぽう実践するだけである。本で読んだり、人のをみたりしたのを頭に思い浮べながらやってみるだけである。このところに問題はありはしないか、もちろんやってみて、人に批評を求めるということもやる。研究会などで公開授業をやって批評をし合うというのはその例であろう。しかし研究会でどこまで、その実践の実体が分析されて、話し合いがなされるか、中には他人の感情のことを気にして思ったことをいわない人もいるであろう。また話合いも、お互がみな印象批評をしていることになっているということも、往々にしてあるのである。

このように考えると、実践のところでは、われわれはこれでよいのだというつもりになってやってみているということが多く、本当にいいかどうか、その辺はとても自信がないのではないか。そこでもっと、はっきりしたものをつかまえて、どこをどうしたらということが考えられないものだろうか。

人の書いたもの、やっているものをみて、それでわかるというが、人間の教育活動の場合は、相手が生きものであって、生徒がちがえば、いろいろちがった条件も出てくる。同じことは二度と起らないのである。だからある一つの例が非常によかったといっても、それが必ずしもどこでもあてはまるとは考えられないのである。そこに自分自身の場合の事実がどうであり、どこに問題があったかをつかまえなくてはならぬ理由があるのである。

（４）

われわれのこれまでの教育研究とか、教育の勉強とかが、他から受けとることばかりを考えて、毎日自分のやっている現実をつかまえ、そこから反省の材料をうるというようにいかなかったということについては、一度大いに考え直してみなくてはならぬと思う。研究とは本来現実研究なのではないか。現実の実践があり、それが反省されて、理論も出てくるのである。その理論が実践をまた生み出すが、その理論の正しさを決するものは、やはり実践でないか。実践こそ、理論を決する場なのである。その現実がこれまであまり、研究とか勉強とかの場合に目をつけられなさすぎたと思うのである。現実の材料でものを考えるということ、これが今後のわれわれの最も大切なことでなくてはならぬ。

この現実研究で、現実をつかまえ、そこで研究をするということを、これまでの研究とちがって、調査ということばで呼んでおこう。調査とは、まず基本的にそういうものなのである。

われわれが、現実研究という点について欠けているのは、われわれの歴史と伝説のなせるわざである。昔のことはいわずとも、日本が近代教育をとりいれてから、これまでたえず、よそから学ぶということをやってきた。これが、ヨーロッパのように、自分でやってみて、それを反省して理論をたて、新しいものを生み出すことを考えなければならぬ運命におかれていたのなら、またちがった物の考えかたが生れてきたであろう。ところが、外国のものをとり入れ、それは中央の指導的な人物によってなされ、それが地方の先生方に流されるということになってきたので、われわれはものを学ぶということについて、それ以外に方法はないかのごとく考えるようになってきてしまっている。それ以外に方法が考えられないという習性ができているのである。

これはまったく悲しいことだと言わなくてはならぬ。私が今ここにこれだけ言っても、まだ、そうだ研究とは本質的にそういうものだと考えられない人が多いであろう。われわれのセンスはそうなってしまっているのである。しかしわれわれはもうそういうことを改めなければならぬ段階にきている。われわれは自分の実践の中から、次の実践を生み出さなくてはならぬところに来ているのである。だから現実研究が最も重要なことになるのである。

といって、われわれは、もうよそからものを受け取らなくてもよいということではない。他人のことを参考にしなくてもよいということではない。しかし、それは参考、字義どおり、考え方に参加してもらうのであって他人のものをそのままうけとるのではない。そこには自分の現実に対する自主的な研究があるのである。およそそういうものがないところに、他人の考え方を受け入れることも本当はできないはずなのである。われわれが従来外国のものをうけ入れてくるときでも実は自分のものがあったのである。ただそれが、自覚されていなかっただけである。自分の経験を自分なりに、ごくまずしい方法で反省して、自分の考え方をもっていたのである。そうして、それなりに、他人のものを受け入れていた。だから他人のものを受け入れていく行き方もまずしいのである。もし自分の経験をも

っと科学的にやっていればそれに応じて他人のものをより豊かに受け入れることができるのである。自主的である方が、他人の意見もよりよく参考にできるのである。

現実研究とは、こういう自主的な研究であって、これを調査ということばで呼ぶのである。

（５）

調査はだから、手間のかかるものである。われわれは今まで、すぐれた人に、理科の学習はこうすればよいというようなことを聞いて、学習指導が上達すると思っていた。そういう話は、どうしたって、一般論になる。それで幅広く、全体のことがわかるような気がする。調査となると、最も具体的であって、そんな一般論は論じられない。何しろ材料がうんと具体的になってくる。たとえば、１時間の理科の学習指導の現実をおさえるということになっても、これを記録にとるのに１時間かかる。その授業をみて、生徒や先生の活動がどうだったかを記録しなければならぬ。それでただ１時間の材料で、理科の一つの単元ということになれば、少なくとも３，４時間はそれをとらなくてはならぬ。それだけの時間と手間をかけるのはなかなか大変だろう。それでも、一つの単元について、１人の学級の実践がどうだったかということがおさえられるだけである。それをいくつもあつめて比較研究ということをしなければならぬというようになると大変なことである。しかしそこから出てきたことは具体的な材料にもとづいていて、しっかりしたものである。概念的に学習指導はこういうふうにやるべきだなどということとはちがうであろう。それが現実研究の力強さなのである

本当はこうしてやらなければ、さまざまな実践を基礎にして、具体的な事実を中に含んで、しかも理論的なものというのは出てこないのである。

こういう調査研究をやらなければ、われわれの本当の実力はのびないであろう。いつまでたっても他人からの借りものなのである。

調査について語る場合に、最も大切なことは、以上のようなことだと私は思っている。こういうことを忘れてただ調査票のつくり方や形式だけを問題にしてもなんにもならない。調査そのものがまた借りものなのである。それではわれわれは永久に浮ばれない。われわれは自分の目で、自分の足下をみて、自分でものを考えていくために、調査を必要とするのである。

（つづく）

（国立教育研究所）